

## 函館ワンニャン物語 ⑤ ～ムック～

### ◆湯の川温泉街

6月の下旬、晴れ渡った空のもと、聖子がラブを連れて散歩をしている。

ふと見ると向かいから、むく犬が一匹で歩いて来る

聖子「ラブ、だめ！おいで！」

聖子はリードを強く引き、ラブを小路に連れて身を隠す。

好奇心旺盛なラブは、むく犬の方に行こうとするが聖子が強く抑える。

やがて、むく犬は行ってしまふ。

### ◆大森町慰霊堂付近（十日後）

仕事に向かう途中、聖子は野良犬を見かける。

よく見ると十日前に散歩で出会ったあのむく犬である。

聖子「あっ、あの犬・・・」

車を止め、むく犬が慰霊堂の方に歩いて行くのを確認する。

### ◆館岡家宅（夕食時）

聖子が、気になっているむく犬の話始める。

聖子「十日前にね。湯の川の黒松林のところで、むく犬に出会ったのよ。」

洋一「今時、むく犬って珍しいんじゃない。」

聖子「それが、離れていたの。私、ラブの散歩中だったから、ケンカすると困ると思ってラブを引っ張って隠れたんだけど・・・」

洋一「それは賢い。ケンカして怪我でもしたら、大変だからな・・・。」

聖子「そのむく犬、そのまま居なくなったんだけど、実はね、そのむく犬に今日また会ったのよ。」

洋一「へえー、どこでさ。」

聖子「慰霊堂のところ、慰霊堂の近くの川の土手あたりを歩いてた。もちろん一匹で。近くに人は確かいなかったと思う。」

洋一「それで、どうしたいの。」

聖子の顔をのぞきこむ。

聖子「何か、すごく気になって。明日、休みでしょう。慰霊堂に行ってみない？」

洋一「聖子がそこまで言うなら、しかたない、行ってみるか。」

#### ◆慰霊堂付近

慰霊堂付近を搜索。

やがて、自転車に乗っている人を吠えながら追いかけているむく犬を見つける。

自転車がある場所から一定の距離離れると、追いか

けるのを止め、自分の縄張りに戻っていく。  
縄張り内に自転車があると吠えて追い出しているらしい。  
よく見ると、むく犬の近くにもう一匹柴犬がいる。  
柴犬を守っているつもりなのか。  
その後、二頭で車庫の床下に入って行った。

聖子「いた。あの犬、あれがそう。」

洋一「ずいぶん、吠えまくってたけど。もう一匹柴犬もいたな。」

しばらく様子を見る。  
自転車が通りかかる度に、床下からむく犬が出て来ては吠えている。

洋一「さあ、どうする？」

聖子「近所の人に聞いてくるわ。」

むく犬と柴犬が隠れている車庫の隣の家を聖子が訪ねる。  
洋一は、むく犬と柴犬の様子を見守っている。  
間もなく聖子が洋一のところに戻る。  
柴犬は、ひと月前くらいからこの辺に住みついていたこと、そこに一週間前からむく犬が来て住みついたこと、また近所からは、保健所に連絡を入れ捕獲してもらおうという声もあがっていて、柴犬は自分で飼おうと思っているが、むく犬までは飼えないということを伝える。

#### ◆館岡家（居間）

洋一と聖子の周りには、ラブ、クロ、ウル、ゴン太の4頭の犬がいる。

猫も数匹その傍らで寝ている。

聖子「どうしよう」

洋一「どうしようって、どうする？」

洋一が、お茶を飲みながら聞き返す。

聖子「経済的にはもうかなり苦しくて、お金の余裕なんでももちろん無いんだけど、このままだとあのむく犬、保健所に連れて行かれてしまうと思うと・・・。」

洋一は黙ってラブとクロがじゃれている様子を見ている。

聖子が、ゴン太の頭をなでながら、自分に言い聞かせるように話し出す。

聖子「ここにいる犬たち、みんなそうなんだけど、私たちと運命的な出会いがあって、ここにいると思うの。もし私たちと出会っていなければ、4頭ともおそらく今は・・・」

洋一「おそらく・・・、ではなく、間違いなく処分されていたと思うよ。それは、間違いなくね。」

聖子「あのむく犬との二度の出会い、運命を感じるって言うよりも、もう奇跡的出会いだと思うの。」

洋一「だから？ だから助けるって言うんだろう。家で飼いたいって言うんだろう。」

聖子「そう。だめかなあ。」

洋一「だめかなあって、もう飼うしかないだろう家で・・・、そうと決まったら早速動くか。」

その日から毎日、むく犬に餌をやり、慰霊堂まで出かけた。

一ヶ月後、何とか洋一と聖子に慣れてきたむく犬は『ムック』と名付けられ、飼われることとなった。その日は、ちょうど函館港祭り、花火大会の夜であった。

(「函館ワンニャン物語 ⑥」へ続く・・・)